生物多様性国家戦略の見直しに関する懇談会
第１回会合（発言概要）

平成１８年8月２４日　１０：００～１２：２０
出席委員：石坂座長、岩槻委員、小野寺委員、中道委員、林委員、鷲谷委員

・江戸時代末には草山が農地の１０倍はあったはず。それらは森林に変化したと思われるが、よく調べることも重要。
・江戸から明治にかけてススキ草原は３５０万 ha あったと思うが、現在原野といわれるものは湿原を含めて１０数万 ha。多くは森林に変わったであろうが、例えば東京都内の茅場など立地の良いところは宅地になった。
・全国に広くあった焼畑（対馬の木庭作（こばさく）など）の変遷も追うべき。
・メダカの地方名や子供の草あそびなど生きものに関わる文化の多様性の変化も調べて欲しい。
・底曳網は日本の沿岸を年７回曳いている計算になる。沿岸漁業の漁獲量だけでなく、沿岸の海底の状況がわかるデータも集めてはどうか。
・日本の森林は１００年間で面積は変わっていないが質は変わっている。すなわち実相として大きく変わっているということを認識すべき。
・日本は森とウェットランドの国。日本人は長い間その特徴を活かして暮らしてきた。今や人工林は手入れができず、水田は休耕田となり、身近だった種が絶滅危惧種になっている。広い意味での自然再生が必要であり、それにより生態系サービスを回復できれば、国民的にも地球規模でもメリットがあり、次の世代への継承も可能となる。
・過去１０年間施策は進んできたと思うが、何ができていないから良くなっていないのかを分析する必要がある。今回のデータは全体を見るには良いが、個々のテーマを論じるうえでは不十分。その場合、環境面だけでなく文化面やライフスタイル、経済の動きなどを見ることが必要。
・里山問題で決定的なのは薪炭生産が経済性を失ったことであり、それに代わるものがなかったこと。また小規模林家が圧倒的なことが里山林の扱いを難しくしている。
・里山で活動している団体の５割以上が３大都市圏であり、里山をどう使うかという意味では、都市の問題でもある。一方、都市の中の森林にも着目すべき。

・データは議論の基礎として重要。誰でも使える形での提供が必要。
・剥製、骨格標本は、「もの」でしか訴えられないという点で重要であり、充実が必要。
・生物多様性センターは、「センター」を名のるには規模が小さすぎる。他機関との連携などネットワークを図る中で、鍵を握る役割を果たすなど生物多様性情報をリードする方向を目指すべき。

・全国各地で活動しているＮＧＯからもヒアリングすべき。
・生物多様性に対する意識を高めるためには、学校教育での取組など文部科学省の関与も必要。
・生物多様性保全のためには国だけでなく地方公共団体や民間の取組も重要。企業の参画を求める取組とともに、戦略をわかりやすく伝えることが必要。